

## 七〇歳の挑戦 K2峰展望

藤田和清

### 一、プロローグ

六十歳で定年退職し、十年が過ぎようとしていた。自分の健康寿命を九〇歳と仮定すると、残り二〇年となり、思ったほど長くないことに気付きはっとした。

と同時に七〇歳と言う人生の節目に身体的、精神的に自分を試してみたいと言う気持ちが湧いてきた。それは少し大袈裟に言えば、命を懸けても良いとさえ思う強い気持ちであった。しかし何に挑戦するかが決めてなく未定の何かを心の中で懸命に探し続けていた。そうだ!! K2峰展望行がペンディング状態である事を思い出した。十年前に一度計画し、実施寸前まで進めていたが、その時の自分の体力を考え、やむを得ず挑戦を諦めた経緯があった。その後の十年を考えると、体力は確実に低下し、参加することへの危険度は遥かに増していることが想像

できた。でも今回そんな事は完全に無視していた。それほど私の参加への気持は、体力の低下に反比例して強くなっていた。即刻このツアー会社に参加を申し込み、定員ぎりぎりですべて受付けてもらいほっとした。

格好良く「挑戦」と言う言葉を使ったが、辞書によれば（危険や失敗を恐れず、困難に立ち向かうこと）とあるが、私は自分なりに定義した。（自分自身で予想してみ、成功するか或いは失敗するか決め兼ねる場合や、少なくとも両方が拮抗している場合に使える言葉だ）と思った。誰もが成功するだろうと予想出来るような事は挑戦ではなく、この言葉は使いたくないと自分では強く思った。

このツアーは、パキスタンカラコルム山脈バルト口氷河を約一週間掛けて遡行し、コンコルド氷原まで登り詰め、K2峰（エベレスト八、八四八mに次い

で世界第二の高峰八、八一m）をこの目で仰ぎ見る事である。明らかに「挑戦」の言葉を使って良いと確信を持った。しかしメンバーに着いて行けなくなれば、往復コースなので出発地に戻り待てば良いんだという開き直りと、安易でアバウトな気持が、はつきり言っている底にはあった。

### 二、高度順応（溪谷と高原）

成田空港を四時間遅れで飛び立ったPIA機は、イスラマバード空港に〇二時三〇分着。空港近くのホテルで仮眠の後、中継の街スカルドウまで約一時間のフライトであった。政治的理由で電波誘導が出来ず、有視界飛行で山間を縫うように飛行していった。途中で引き返す事も度々らしく心配されたが、我々の乗った便は無事スカルドウに着陸してくれほっとした。小高い丘の上のホテルからは、インダス河の流れが夕日に映え絶景であった。ホテルは質素であったが、こやかでフレンドリーな従業員は、私のカメラを見て「SONYだ!! SONY

だ!!」と言つて見入つていたので、風景を撮らせてあげたら感動し、それ以後私に対してとても好意的であつた。

高度順応日カブルー溪谷では、可愛い姉妹の笑顔の出迎えを受け、村の鍛冶屋さんも気持の大きな人で、赤銅色の深い皺が印象的であつた。デオサイ高原は、高度四、〇〇〇mを超えており、少し眩暈を感じた。イスラマバード大学の学生達と仲良くなり騒いだ。花の群落では、折りしもエーデルワイスが一面満開であつた。

### 三、アスコレヘジープ移動

日本人メンバー十一名はスカルドウのホテルを三台のジープに分乗し出発した。昨日カメラを触らせてあげたホテル従業員も早朝出発にも関わらず見送りがあり、われ先の固い握手での別れであつた。快晴で遠くにカラコルムの山並みが霞んでいた。途中入山手続き後、五kmぐらいから道は険しくなつていった。崖つ縁の砂利道で、谷には氷河からの濁流が渦巻いていた。突如ジープが四輪ご

と谷側へ一m近く横滑りしたが、運転手の巧みなハンドル捌きで事なきを得た。「何時ものことですから。」と運転手の軽い一言には驚いた。なにはともあれアスコレの出発地に無事に到着し、万歳三唱の我々でした。夕食時の自己紹介で私だけが七十歳、他のメンバーは六十歳前後で、その事が可なりのプレッシャーになりそうであつた。でもどうする事も出来ないことは気にせずベストを尽くすことにして、明日からのトレッキングに備え

早目に寝袋に入つた。テントの間隔から月光に映える無名山を眺め、部落の方から聞こえてくる馬の哀しげな鳴き声を子守唄に深い眠りにおちていった。

### 四、「一日目」トレッキング始まる

BCP  
アスコレ三、〇〇〇m

CP  
ジョラ三、三五〇m

愈々トレッキング初日である。テント前広場には荷物の振り分けを待つポーター達で賑わつていた。我々日本人はTDを含め十一名、パキスタン人はこのツアーのリーダーを筆頭に総勢約七〇名

の大部隊であつた。考えられない贅沢さに思えた。荷物を振り分けられたポーター達は我々に先行していそいそと出立していった。重い荷物専門の馬一頭、ヤギ二頭、鶏数羽であつた。馬や鶏は分かるがヤギが分らなかつた。小高い山の中腹を進んでいた。無名の山々が迫り、インダスの流れが眼下に眺められ氷河が水源の水は茶色く渦巻いていた。コーラスはインダス河の広い河原に出た。白砂は柔かく、足がめり込み大変歩きにくかつた、太陽は既に真上から射し、白砂の反射も強くなつてきていた。午後になり気温はどんどん上昇し三五℃を超えているように感じた。水分は充分取つていたつもりだったが身体からの発散量が多く次第に脱水状態となり、遂に夢遊病者のようになつてしまった。メンバーに助けられ励まされながら一時間ほどでようようジョラのキャンプ地に仙り着いた。「もはやこれまでか、やはり自分のレベルではなかつたのだ」と思わざるを得ない出来事であつた。身体的には自信を持っていたが「七十歳の身体にはやはり無理だつたんだ」と強く思った。

悔しい悔しい反省であった。

日が傾くにつれ気温は下がり始め、多目の水分補給と併せて症状は徐々に回復していった。メンバーからの差し入れや「コンコルディア（K2峰眺望点）まで、最高齢の藤田さんを絶体に連れて行き、K2峰を眺めてもらいますから、藤田さん自身も強い気持で頑張ってください」メンバーの強く優しい励ましに感涙する私であった。今後コンディションに気を配り、絶体上まで行くんだと言う固い気持がメンバー以上に強く湧いてきた。

## 五、〔二日目〕

CP1ジョラ三、三五〇m

スカムツオクCP2三、三〇〇m

体調の回復した私は、メンバーの労いの言葉に励まされながら、インダス河を見下ろす崖道を順調に歩を進めていた。ワイルドローズが咲き、河原にそっくり立つ無名の山々は、風雨で深く切り込まれ鋭い髪を呈していた。

聞こえるのは谷を吹きぬける風、インダスの流れ、メンバーの声だけで極めて無

機的であった。移動距離が短く、高度差も五〇m低くなり、昼過ぎにはスカムツオクに着いた。病み上がりの私にとつては幸いであった。河原に張られたテントには、熱風による砂塵が容赦なく吹き付けていた。テントの間から入り込んだ砂塵は、グラウンドシート上に積もりザラザラしていたが気にならなかった。陽気なポーター達は担当の仕事を終えると広場で車座になり、歌や踊りを楽しんでた。小気味良いリズムに誘われ、体調の戻った自分や他のメンバーもその輪に加わり楽しい一時を過ごした。パキスタンでは政情不安が心配されていたが、全く感じなかった。

## 六、〔三日目〕

CP2スカムツオク三、三〇〇m

CP3パイユ三、四五〇m

インダス河沿いのパイユピークを大きく回り込みながらキャンプ地に向つた。高さ三十mの断崖を削つただけの山道が約一〇m続いており、キャンプ地へはどうしてもこの道を通らなければ

ならなかった。滑落すれば濁流渦巻くインダス河まで止まるところはなく、必死になつて渡り切つた。後続のメンバーも顔を強張らせ真剣そのものであった。一難去つてまた一難、巾五mほどの激しい濁流に渡された壊れそうな梯子橋、ポーターのサポートを得て漸々に渡り切つた。その後一時間でパイユキャンプ地に到着全員が無事を喜びあつた。パイユピークの裾野に作られた林間のキャンプ地で、今夜の寝心地は良さそうに思えた。小型の馬一頭とヤギ二頭も私のテントの直ぐ横の木におとなしく繋がれていた。気になつてたヤギ二頭を連れて来た理由が今夕やつと分かつた。自分達の運命を知つてたのか、観念したような表情だったヤギは数時間後には屠殺され、我々の夕食となつていたので。食べた後からで、ヤギに対して心痛み、心から済まなかつたと言う気持でいっぱいであった。料理長からある動物のソテーを勧められ、こくがあり大変美味しかった。後から教えられたが、なんとなんとヤギの睾丸との事であった。

“紅顔の美少年ならぬ睾丸の禿げ老人”

だと皆で突つたが、私は心底笑えなかつた。暫くして連れて来た鶏数羽が逃げ出し、ポーター数人が必死で追つ掛け回し、逃げ方、追い方、入り乱れての捕り物を見ているようで大変面白かつた。勿論逃げの鶏組を応援した。夕食後、日パ交流会が開かれ日本は「上を向いて歩こう」や「三百六十五歩のマーチ」などパキスタンに哀愁をおびた民謡が披露され聞惚れた。相撲日パ戦で私は行司役で、呼び出しで皆を笑せた。実力は明らかに日本が上であつたが、行司さばきで三勝一敗でパキスタンの勝ちとした。パキスタンは全員が真剣で本当に喜んでた。日パの距離はぐんと近くなり、満天の星空のもと有意義な一時であつた。テントに戻り心地良く眠りにつこうとしたがそうはいかなかつた。テント横の木に繋がれていた馬のダイナミックなオシッコの音をスコールと間違えて起きてしまった。外へ出てみると排尿を済ませた馬がすつきりしたのか、背中をブルツと小さく震わせた。

## 七、「四日目」

CP3 パイユ三、四五〇m 終日滞在

スケッチや写真を撮りに出る人、ポーター達と談笑を楽しむ人、洗濯やシャンプーをする人など思い思いに一日を過ごした。私は、パイユピークを二〇〇mほど登ってみた。一けん登りやすそうに見えたが、大きな砂岩がごろごろして砂利状の急な斜面は歩きにくかつた。真下のキャンプテントでは、ポーター達が蟻のように動くのが見えた。更に一〇〇mほど下にはインダス河が巨大な蛇がうねる様に横たわつてた。一方左上流側にはバルトロ氷河の先端が1kmほど先に窺えた。ポーター達の話では、一〇年ほど前にはこのキャンプ地まで氷河はあつたらしく、詰まり氷河は一年で一〇〇mほど後退していた事になり、温暖化の影響は、はっきりと現れていた。明日からは氷河上をコンコルディア（四、六五〇m）まで、高度差で一、二〇〇mの登りになり、未経験の高度となるので体力的に少し心配になつてきた。一方「絶対に登り切つてやる」と言

う強い信念も湧いてきていた。これは正に挑戦に値するものであつた。キャンプ地から私を呼ぶ仕草が見えたので、ゆつくりと下山を始めた。今夜も馬のオシッコが心配であつたが、別の場所に移されていてほつとした。

## 八、「五日目」 愈々氷河上を歩く

CP3 パイユ三、四五〇m

CP4 コボルツェ三、九四〇m

インダス河へ突き出た尾根を回り込むと眼前に氷河端が覆い被さつてくるように迫つてた。大量の濁水が空中に噴出しインダス河へ激しく落ちていた。轟音としぶきで話も出来なかつた。氷河は何年掛けてここまで下つてきたのであるか何百年？その長く果てしない旅を終え今、大自然へ解き放たれたのだ。その長大な旅路にロマンを感じた。氷河端を登り、三〇分も歩くと静寂そのものであつた。時々氷河深部の軋む音が静寂を破り鋭く響いた。これは氷河が山肌を削り下流へ動いた証拠で、削られた大量の土石は氷河上全面に深く積もつ

てしまうので、氷河といつても全面白くはなかった。こういう場所をモレーンと言いはルト口氷河では九〇%以上がそうなっていた。土砂が剥げ落ち、氷面となった小さな箇所が幾つもあり滑って転倒する事が度々あり私はいつもお笑いの種になっていた。身体の柔らかさでは若い人には敵わなかった。氷河の僅かな動きでモレーン上の大きな岩が転げ落ちてくることもあり注意を要した。連続する上り下り、低酸素状態でのトレッキングは大変厳しかった。休憩時ポーターが入れてくれる飲物が最高に美味しかった。熱い紅茶を啜りながらのカラコルムの山々の絶景は素晴らしかった。早くK2峰を眺めたいとの気持をいっそう掻き立てた。先行ポーターによって設置されたカラフルなテントが遠くに見えきた。周囲の岩に良く映えていた。

キャンブ地には、後一時間で到着との予想は見事に外れ、二時間近くも掛かってしまった。山の様な対象がでかい場合の距離は、自分なりの公式では(目測距離×1.5)2.0倍(実際の距離)で丁度良いぐらいに思えた。山は日暮れが早く我々

のいる氷河も例外ではなかった。夕景のシャッターチャンス逃すまいと仲間と撮影に出掛けた。六、〇〇〇m級の山々が真赤に染り撮影意欲を掻き立てていた。

## 九、「六日目」

CP4コボルツェ三、九四〇m

CP5ウルドウカス四〇五〇m

連続するモレーンや氷の道では何度も転倒した。目には見えないが氷河は絶えず動いており、ルートは定まっておらずリーダーは苦労していた。状況に応じたの判断が求められ、氷河行が成功するか否かはリーダーの力量に掛かっていると信じていても決して過言ではなかった。我々のリーダーイリアスは、何時も冷静、的確に判断しており、安心して着いて行けた。たまに逆戻りしてしまい、につこり笑って「すみませーん」に我々も笑って過ごせ、素直にイリアスの指示に従えることが出来た。体は頑健で強面のする顔であったが、どこか愛すべき人間性も持合わせていて、その事は我々

外国人にも充分に伝わっていた。

トイレは日により高い場所に設けなければならぬ時もあるらしく、二つの岩に単純に二枚の板を渡しただけの(もちろん囲いは着くが)時もあり、中に入り確認すると、約三〇mは果しなく高く感じそれだけで恐怖であった。小便の時は谷風の影響を受けたり、大便の着地の音が全く聞えず不安が残った。他のメンバーも全く同じ事を言っていたので、イリアスを通じ改善を求めた事にした。高度が四、〇〇〇mを超え頭が少しふらつく事を除けば、正にパラダイスであった。ポーターが氷河水を溶かし作ってくれる甘いコーヒーと山の風景、何処にこれ以上の贅沢があるだろうか。トイレの一件に拘っている我々の心の小ささがバカらしくなり、改善の申し入れは見送る事となった。夕食後、イスラム聖者の生誕を祝いケーキが作られ、ケーキカットを最年長の私に命じられた。聖者のことなど分からなかったが、名誉なことなので堂々とケーキカットを行い聖者の生誕を祝った。お札に少々不謹慎だとは思ったが、洗面器を小道具にドジョ

ウスタイを踊ったら、ヤンヤの喝采を受けた。恥ずかしながらもやつて良かったと思つた。明日にはどんなニツクネームがついているか楽しみでもあつた。

## 十、「七日旦」

CP5ウルドゥカス四、〇五〇m

CP6ゴレII四、三八〇m

悪路の上り、下りを根気よく繰り返してやつとゴレIに着き昼食となつた。目前の大きなセラック(氷河の内部圧力により表面上に押し出された氷塊)その後方のマツシャープルム峰(七、八七一m)、山頂からのエッジ状の尾根は、何人をも寄せ付けない凜とした鋭さがあつた。ダンディーでもあつた。メンバー全員放心状態で見とれた。ゴレIIに着いた頃には日は傾き西壁は眩いばかりに輝いてはいたが、昼のような凜々しさは無く、何か物悲しさを呈していた。今夜からは氷河上にテントが設営されるので湯タンプが配られ、それぞれで寝袋に差し入れた。無名峰の尾根すれすれに出た大きな白い月は、辺りを満遍なく照らしてい

たが、日本をも照らしているであろうか。少しホームシックになつている自分に気が付いた。テントから離れて繋がれていた馬は、白い月を見たからなのか哀しそうに二、三度鳴いたがそれつきりであつた。

## 十一、「八日旦」

最高点コンコルディアへ

CP6ゴレII四、三八〇m

CP7コンコルディア四、六五〇m

「今日午後コンコルディアに到着出来、K2峰(八、六一一m)を眺められるでしょう」イリアスリーダーよりメンバー全員に伝えられた。平静さを装いゴレIIを出発した。モレーンや大きなセラックの出現で、その間隙を縫つてのジグザグ歩行には時間を要した。氷河自身の重みで出来たクレバスは、直径約五〇m×深さは約三〇mもある大穴で、下流側の暗渠へ濁流が吸い込まれるように落ち込んでいた。ゴレIIのテントを出発し、どれくらいの間経過があつたであろうか、眼前にガツシャープルムIV

峰七、九二五mの山容が大きく迫つてきていることで、我々はカラコルム山系の核心部に深く入り込んでいる事を察していたが、依然としてK2峰は姿を見せてくれなかつた。最後のテント群が直ぐそこに見えた。逸る思いと息苦しさの中、歩を速めようとしたが思い通りには進めなかつた。

トレッキング初日脱水症状となり一時、メンバーとの同行を諦めかけたが、メンバーに助けられ、耐え踏ん張りよくそこまで来られたものだと思つた。七〇歳の老体に鞭打ち、歯を食いしばり頑張っている自分自身がたまらなくいとおしくなり、全てを曝け出し泣き出したい気持ちになつていた。小高いモレーンを一登りし、顔を上げると、左奥の谷から巨大なK2峰が優しく自分目にかけて覆い被さつて来た。眼前のメンバーの顔で、現実である事を強く強く覺つた。パキスタン側全員の拍手と大声での出迎えの中へゴールイン。握手され、荒々しく肩を叩かれ、揉みくちやにされつ放しであつた。感動のあまり立っている事が出来ず、モレーンの石や砂利の上に勢

いよく顔から倒れ込んでしまった。額全面擦過で血染めの顔、これぞ七〇歳の青春であつた。暫くして気が付くと椅子に座らされ、大粒の涙を溢している自分があつた。周りのメンバーも同様に涙を流されていたようであつた。

日本、パキスタン全員での万歳三唱には、額の怪我など関係なく、ありつたけの大声で参加した。願わくばK2峰にも届くことを祈りつゝ。

万歳：万歳：万歳!!

カラコルムの谷に木霊していた。

今回「K2峰を展望できた事」は、本来の目的が達成された事であり、心底感無量であつた。そして「メンバーの心の温かさを思いっきり知らされた事」もあつた。私にとつて前者よりも後者の方が、遥かに大きな収穫だつたかもしれない

ありがとう!!